

三人の山子・仁多郡奥出雲町竹崎

令和3年1月1日掲載予定

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



語り手 田和朝子さん（明治40年生まれ）  
収録・昭和47年5月6日

あらすじ

昔。ある山子が三人おつて、毎朝、旦那さんの家の門を通るとき、初めの豊吉という山子は、「旦那さんの食わつしやる膳で、旦那さんの食わつしやる膳を食うてみりやいと思ふ」と言う。次の格という山子は、「おら、お式膳に白金いっはいもらやあええと思ふ」と言う。三人目の元という者は、「おら、この嬢さんの婿になりやええと思ふ」と言う。

そのうち旦那さんがそれを聞いて尋ねられたげな。「豊吉、格、元、わりや三人、毎朝、家の門を通りや、なんだか言うておるが、何言うて通りや。まず豊吉、わりや何て言うて通つた」「いや、旦那さんの食わつしやるような膳で、旦那さんの食わつしやるようなご馳走を食うてみりやいになあ、と言いましてございます」  
それから、旦那さんはすぐ女中さんに、「はや、わし

が膳にわしがいつも食うようなご馳走をこの豊吉に食わせてやれ」。

そこで女中がそうしてやると、旦那さんは今度は番頭さんに「格には式膳に白金をいっはいやつてこせ」と言つてそうしてやりました。最後に元に向かって、「元、わりやどげ言いて通つて」といくら聞かれても、「へえ」としか言わんげで、他の二人が錢をもらつたり、ご馳走をよばれたりしてしまつても、叱られると思つて言わんげで、旦那さんは、「何だい、言いてみい。他の者はみんな言つたのに、おまえ一人言わんげな。言われんことはないけん言え」あまり言われるので、元も「おら、嬢さんの婿になつてみればいい、と言いましてございませう」と言いました。すると旦那さんは、「はあ、そげか。ほんならこへ、いま嬢がい、着物を着て出て和歌を詠むけん、それを詠み返してみい」と言われました。

それで待つていたら、いい着物を着て簪挿して、嬢さんが出られ、「天より高いところに咲く花は」と言われたので、「落ちれば谷のムクゲ（木

樫）となる」と元は答えました。旦那さんは喜んで、「ああ、こうこそ、うちの婿だ」と言われて、元は望み通りにこの婿になりました。  
それで、同じ望みを持つのなら大きな望みを持つものだ。こぼし。

解説

何気ない話でありながら、最後のオチ「同じ望みを持つのなら大きな望みを持つのだ」とから、この話の持つ教訓が分かる。なお、お嬢さんと山子の掛け合いの詞章は、字余りながら合わせれば短歌になる仕組みである。  
つまり、「天より高いところに咲く花は、落ちれば谷のムクゲ（木樫）となる」であり、修正すれば「天より高く咲く花も、落ちれば谷のムクゲかな」くらいだろうか。

わたしたちの祖先は、まるでイソツブ寓話のように、このようなやさしい話の中へも、愛すべき子孫に期待をこめてちゃんと守るべき道を示してくれているのである。

（元島根大学法文学部教授）



[https://kanbenosato.com/minwa/kancho\\_200807.html](https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200807.html)